

# 松本市岡田西裏遺跡

—緊急発掘調査報告書—



1986・3

長野県松本建設事務所  
松本市教育委員会

# 松本市岡田西裏遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1986・3

長野県松本建設事務所  
松本市教育委員会

## 序

一般県道惣社岡田線、岡田西裏地区の道路付替工事は、旧道の狭隘区間(国道254号～国道143号)を解消し、大型車輌の交通を可能とすべく計画され、53年より用地買収に着手しました。幸い地元の皆様の御協力をいたゞき、本年3月をもって改良工事は完了の運びとなりました。

岡田西裏地区については、文献等で古くより人々が生活した遺跡が埋蔵されていると知らされておりましたが、今回の道路拡幅工事を行う箇所が埋蔵文化財を包蔵する土地であるため、工事に先立ち松本市教育委員会に調査をして頂く事になりました。

その結果は後述のとおりですが、調査範囲が狭いにもかゝらず、古代人の生活の跡が日の当りに検出されたことに驚きと歴史の古さを感じました。

この記録保存によって、工事も無事進捗し、現代の人々に利用されますことは、文化財と開発の接点を見出した思いがいたします。

本調査にあたり、市当局の方々をはじめ、作業に携わった方々に厚く御礼申し上げると共に、本書が広く活用されることをお祈りいたして序文といたします。

昭和61年3月

長野県松本建設事務所長 赤羽美津夫

# 序

岡田地区には古墳をはじめ、多くの遺跡が存在しております。今回、長野県松本建設事務所より、岡田神社参道内の県道拡巾工事に先立つ埋蔵文化財発掘調査の委託をうけ発掘調査を行いました。

岡田神社は延喜式に記載のある由緒ある神社であり、果たせるかな僅かな調査部分より、平安時代の家を一軒検出いたしました。これらについては本文にて詳細に報告されております。

本調査を実施するにあたり、ご苦労いただいた作業員の方々、また岡田史談会の方々、および関係機関より、深いご理解をいただいたことなど、お世話をいただいた方々に対して、心からなるお礼を申しあげるとともに、本書が古代史解明の一助になれば幸と願うものであります。

昭和61年3月

松本市教育委員会 教育長 中島俊彦

## 例　　言

1. 本書は昭和60年9月19日より10月7日にかけて行なわれた、松本市岡田<sup>西裏遺跡</sup>の緊急発掘調査に関する報告書である。
2. 本調査は松本市が長野県松本建設事務所より委託をうけ、松本市教育委員会が調査を行なったものである。
3. 本書の執筆は第2章第1節 小口妙子、第2節 直井雅尚、第3章第2節2 直井雅尚、第3節 神沢昌二郎が分担し、他は熊谷康治が担当した。
4. 本書の編集は事務局が行なった。
5. 本書作成にあたっての作業分担は次の通りである。  
　　遺構 製図、トレース：向山かほる  
　　遺物 復元・尖測・トレース：土橋久子、向山かほる、百瀬敦
6. 本書掲載の遺物写真は岩渕世纪氏にお願いした。
7. 出土遺物及び図類は松本市教育委員会に保管してある。

## 目　　次

### 第1章　調査経過

　　第1節　調査に至る経過..... 1

　　第2節　調査体制..... 1

　　第3節　作業日誌..... 2

### 第2章　遺跡の環境

　　第1節　周辺遺跡..... 3

　　第2節　西裏遺跡既出遺物..... 6

### 第3章　調査結果

　　第1節　調査の概要..... 9

　　第2節　遺構と遺物..... 11

　　第3節　調査のまとめ..... 32

# 第1章 調査経過

## 第1節 調査に至る経過

昭和60年9月、長野県松本建設事務所建設課設計第一係、上田一主工より岡田地区の旧河田宿を通り抜ける国道254号線と、その西側の大口沢へ出る国道143号線とを結ぶ、岡田神社参道（県道・懇親社・岡田線）の道路拡幅工事が行われるが、埋蔵文化財についてはどうかとの連絡をうける。市教育委員会では工事予定地が埋蔵文化財を包蔵している場所で、西臺遺跡の一部分にあたること、先年すぐ北側の市道開設の際にも埋蔵文化財の発掘調査を行っており、その際、平安時代の住居址や多量の遺物を検出した例があるので、今度も埋蔵文化財の調査を行う必要があることを説明する。

その結果、工事着工に先立って埋蔵文化財発掘調査を行うこととなり、市教育委員会が長野県松本建設事務所の委託を受けで調査を実施することとした。

工事は予定より若干早まって9月中旬に着工ということになり、市教育委員会では9月19日より現場作業を開始し、調査終了地点から工事に入ることとした。そのため下記のような調査團を編成した。しかし、市内3ヶ所で既に発掘調査を進行しており、ために調査員はほとんど本遺跡調査には参加できなかった。また現場における連絡事務等は地元の高橋徹氏にお願いした。

## 第2節 調査体制

団長 中島俊彦（松本市教育長）

発掘担当者 神沢昌二郎（松本市教育委員会文化係長 日本考古学協会員）

調査員 西沢寿光、三村繁、横田作重

協力者 高橋徹、瀬川長広、中島新樹、吉沢清弘、岡村行夫、平郷代八、向山かほる

向山秀子、土橋幸子、吉瀬敦

事務局 市教委社会教育課長 浜憲幸、文化係長 神沢昌二郎、主事 熊谷康治

### 第3節 作業日誌

昭和60年9月19日(木) 曇 資材搬入。テント設置。 作業員：瀬川他1名

9月21日(土) 晴 重機による排土作業。 作業員：高橋

9月24日(火) 晴 作業継続。

9月25日(水) 曙 作業継続。 作業員：高橋

9月26日(木) 晴 作業継続。1住検出、掘り下げ開始。 作業員：高橋他3名

9月27日(金) 晴 1住検出。 作業員：高橋他2名

9月28日(土) 曙時々雨 精査、ピット検出後半割。 作業員：古沢他2名

9月30日(月) 晴 村山氏宅北側にトレーナー設定。 作業員：高橋他3名

10月1日(火) 晴 1住及び道路南壁土層図作成。 作業員：向山

10月2日(水) 晴 1住床面精査、遺物出土図作成。 作業員：向山他3名

10月3日(木) 晴 1住床面精査継続、柱穴検出。 作業員：向山他3名

10月4日(金) 曙 1住柱穴半剖、土層図作成。完形坯、要出土状況図作成。 作業員：向山  
他3名

10月7日(月) 曙後晴 全体図作成。作業終了。 作業員：向山



第1地点 作業風景

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 周辺遺跡（第2図）

岡田地区は松本市の北北東に位置する南向きの丘陵地を主とする地域である。西方の城山山塊の塩倉池遺跡から旧石器時代の遺物が表採されていることより、当地域の歴史は古く、続縄文時代には、前期（キツネ塚、白金町）、後期（西塙舟）とまばらであるが、中期の遺跡数は急増し、広範囲に分布している。女鳥羽川によって形成された微高地に沿って、北から西小路、道間、西裏、上の段遺跡、やや西によって、さがり遺跡、山麓に沿っては北から、矢作、向山、宮ノ後遺跡、中腹に登って、田溝南、塩倉池、塩倉峰、峰の平遺跡と続く。

縄文時代中期の遺跡数の多さに比べ後期、晩期の遺跡数は急減し、續く弥生時代には僅かに西光寺塚、白金町の二遺跡が知られているだけであるが、田溝南で銅鏡が採集されるなど今後の発見が期待される。

古墳時代以降には当地域全面に遺跡が広がり、微高地に沿って北から一里塚、中島、蓬台、大願寺址、阿弥陀堂遺跡から、今回剥奪を行った西裏と続き、西南へ移って、さがり、山伏塚、上ノ段遺跡があり、城山山塊中腹では田溝池を中心とした遺跡がある。山伏塚遺跡以外は正式な調査が殆どなく、遺物採集地も多いことから、時期・概要などに不明点を残すが、古墳時代以降、特に奈良・平安時代の遺跡の集中度が他に比べ高いと思われる。

当地域には古墳も多く分布し、女鳥羽川の氾濫原には猫塚古墳、水汲古墳群を中心とする積石塚古墳群が広がり、南に下って元原古墳群までを含めると、相当広い範囲を有している。これに対して城山山塊には単独墳として塩倉塚山古墳があり、その様相は氾濫原に位置する古墳群と好対照をなしている。いずれの古墳の造営期も古墳時代後半以降である。

また、当地域の最も大きな特色として、城山山塊の芥子坊主山に分布する平安時代の古墓址群がある。これらは比較的平坦な山稜の緩やかな傾斜と、浅い谷の発達という地形に加え、原材料の確保が容易であるという好条件下に形成されており、現在の所、山田古墓址群と田溝池古墓址群が知られている。過去に一部が調査されてはいるが、大部分は未調査のままである。古墓址の全容は不明であるが、集落址との関係も含めて今後の調査、研究が期待される。

#### 参考文献

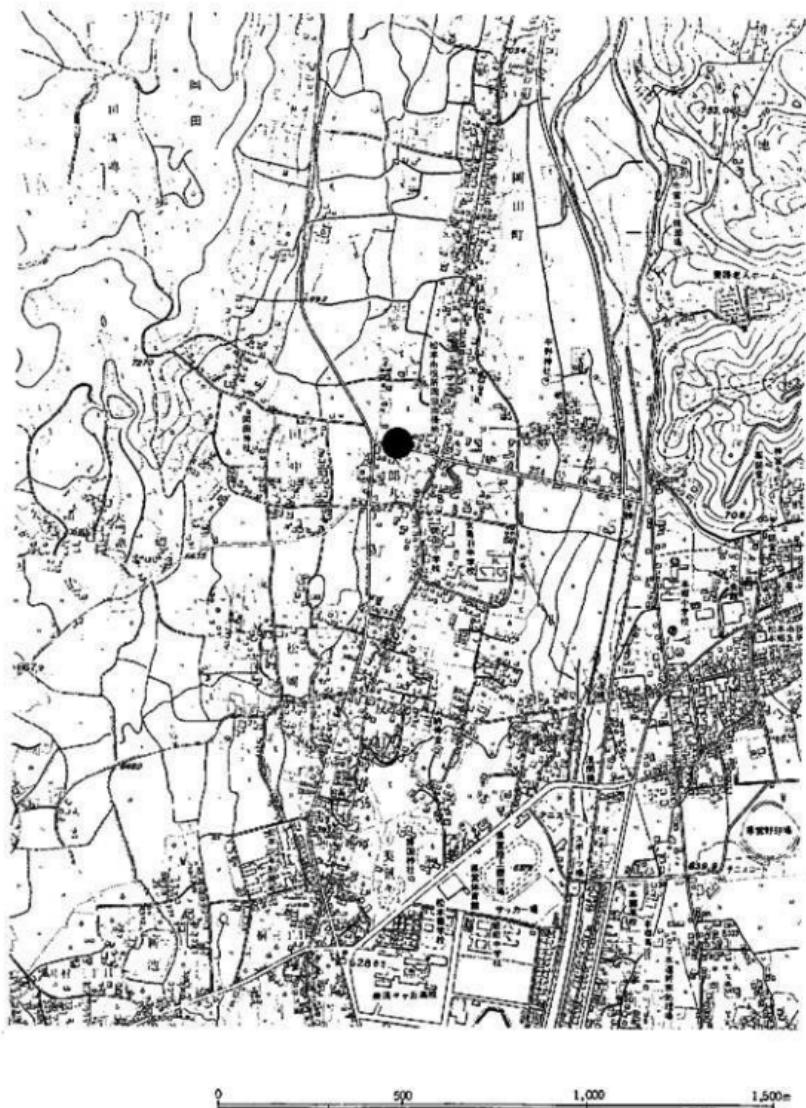
滋賀県史「東近畿編、松本市、堺尾市誌」昭和48年

松本市教育委員会「松本市内出土の銅鏡」昭和48年

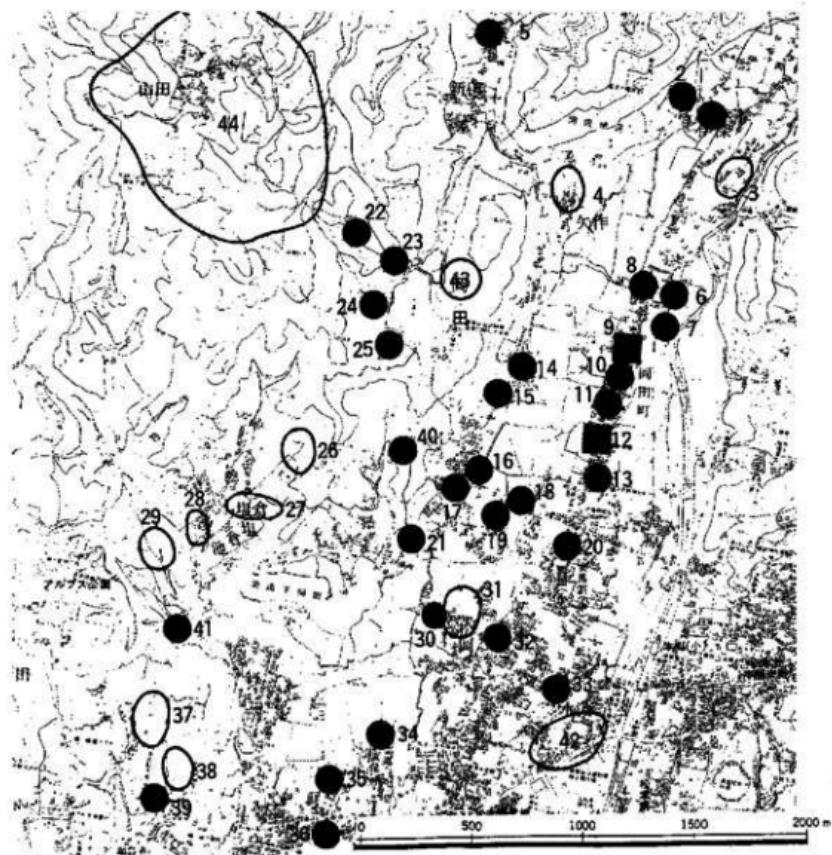
（1） 荏原徹「田溝池出土の銅鏡」『信濃』II-7 昭和17年

（2） 中島豊晴・河西清光「松本市田溝古墳群の調査」『信濃』III-16-4 昭和20年

滋賀縣教育局「長野縣松本市調査地区田溝池における東北朝御跡の調査」『信濃』III-21-12 昭和44年



第1図 調査地の位置



- |            |             |           |             |
|------------|-------------|-----------|-------------|
| 1. 西小路遺跡   | 12. 西裏遺跡    | 23. 田溝入遺跡 | 34. どうこん原遺跡 |
| 2. 麟弘寺跡遺跡  | 13. 下出山遺跡   | 24. 田溝西遺跡 | 35. キツネ塚遺跡  |
| 3. 一黒塚遺跡   | 14. 向山遺跡    | 25. 田溝南遺跡 | 36. 白金町遺跡   |
| 4. 矢作遺跡    | 15. 西光寺遺跡   | 26. 御宝殿遺跡 | 37. 庫の平遺跡   |
| 5. 安土遺跡    | 16. 宮北遺跡    | 27. 塩倉池遺跡 | 38. 許水池東遺跡  |
| 6. 道間遺跡    | 17. 宮後遺跡    | 28. 西塙倉遺跡 | 39. 許水池南遺跡  |
| 7. 高根遺跡    | 18. 中田遺跡    | 29. 塩倉峯遺跡 | 40. 清水大古墳   |
| 8. 中島遺跡    | 19. 稲之内遺跡   | 30. 山伏塚遺跡 | 41. 鹿山古墳    |
| 9. 蓬台遺跡    | 20. 猫塚遺跡    | 31. さがり遺跡 | 42. 水汲古墳群   |
| 10. 大原寺遺跡  | 21. 矢崎遺跡    | 32. 上ノ段遺跡 | 43. 田溝古墓群   |
| 11. 阿弥陀堂遺跡 | 22. 田溝中ノ沢遺跡 | 33. 反目遺跡  | 44. 山田古墓址群  |

第2図 周辺遺跡

## 第2節 西裏遺跡既出遺物

昭和58年度の調査の際、第1号住居址とグリッドから多量の土器が出土しており、岡田西裏遺跡の性格を考える上で今回の調査とともに重要な位置を占めるものなので、その概略を紹介する。

### 第1号住居址出土の土器（第16~18図1~41）

須恵器壺類、土師器壺類を中心に多数の土器が床面上および覆土中から出土している。図示できたものは41点、種別・器種でみると、土師器では鉢(18)、甕(17・19・22~24)、小型甕(15)、円筒形の土器(20・21)、須恵器では、有台壺身(4~7・25~27・30~41)、同蓋(1~3)、無台壺(8・9・11・28・29)、高壺(14)、甕(16)、壺(10・12)、小形の甕(13)がある。破片のものが多いが高壺・蓋・土師器壺の中には一括品がみられる。床面付近から出土したものは1~17(第16区)である。

### グリッド出土の土器（第18~21図42~118）

1G(グリッド名、以下同じ)から8Gまでグリッドを設定し、各グリッドから土器の出土があった。図示したものと出土グリッドの関係は、1G(42~85・116~118)、3G(86)、4G(87~89)、5G(90・91)、7G(92~98)、8G(99~114)となる。種別はすべて須恵器で、器種としては、無台壺(46・47・61~64・72・84・98・105~109・112・115)、有台壺身(54~56・58・59・69~73・75・92~94・96・100・101~104・116~118)、同蓋(43・50~53・66~68・83・99)、高壺(65・82・85・89・91)、盤(44・45・57・60・79・80)、長頸壺(42・49・76・95・97)、短頸壺(48・78)、横盤(88)、甕(81・86・87・110・113・114)、器種不明のもの(10・77・90)がみられる。1G・8Gからの出土が多いが、1Gには第1号住居址があり1G出土土器の中には第1号住居址に属するものが多分にあるものと推定される。

### 出土土器の特徴

器種毎に形態・手法上の特徴をみていく。

土師器壺は第1号住居址から1点出土しているので、口径23cm・底径12.3cm・器高11cmを測る逆台形を呈している。体部外面にロクロナデ、底面に回転糸切りの痕跡を残し、内面は横位のヘラミカキと黒色処理がなされている。

土師器甕はいずれも第1号住居址から出土しており、長胴形を呈す。口縁部は肩部から「く」の字次に外開するが、22は僅かに外反している。上端に平坦面・凹面を作っているもの(19・23)もある。調整は外面はいずれも縱位のハケメを密にしているが、内面は疊たハケメをもつもの(24)縱の浅い溝状の調整痕をもつもの(19・22・23)に分れる。口縁部はロクロを用いたと思われるよこなでが施されて、内面にカキ口をもつもの(22・23・24)がみられる。

十師器小形表は1点のみの出土で、ロクロ調整痕を明瞭に残し肩部外面・口縁内面にはカキ目が施されている。口縁端に最大径をもち肩部中位が丸く張る。底部を欠損しているが糸切り痕を残すものが予想される。

須恵器無台坏は多量に出土したが全形を知り得るもの（9・84・107～109）は少ない。底面に糸切り痕を残すものとヘラ切り痕をもつものに大別でき、前者が圧倒的に多い。形態は、底面糸切りのものに底面際に一円横方向へ広がる二次底部面状の部分をもつもの（28・64・105）と底面から直接体部が外開するもの（107・109）およびその中间的なものがみられ、底面ヘラ切りのものは外傾度の弱い体部をもって箱形に近い形状を呈する。いずれもロクロ調整痕を頗著に残している。

須恵器有台坏は、やはり多量に出土しており、同無台坏と共に出土土器組成の主要部を占める。口径・器高の差によっていくつかの規格が窺え、大（31）、小（4・7・31）、深（35・36）などに分類できよう。やや丸底の底部から外傾度の弱い体部が外開する箱形から逆台形を呈すものに高台が付される形態をとる。調整では底面すべてに凹転ヘラケズリが施されるものと、中央部に糸切り痕が削り残されるもののちがいがみられる。

須恵器蓋（上記有台坏と組合さるもの）は、出土量は多いがすべて同一形態である。天井部に宝珠形のつまみが付され端部が短く下方へ屈曲する外形を呈する。全面にロクロ調整痕が残り、天井部外面に凹転ヘラケズリが施されているのが観察される。

須恵器高坏は一括品が1点（14）と脚部破片が出土している。一括品は上記蓋のつまみがないものを反転して、すかしをもつ脚部を付した形態をとる。すかしは薄いヘラ状のものを差し入れてつけたようだ。坏部外側中心に凹転ヘラケズリ、脚部内面にしづら痕が観察できる。

須恵器盤は少量出土している。坏部は端部が屈曲して1cm内外に立ち上がる浅い坏部に、坏部よりはかなり径の小さい高台が付される形態をとり、底面には凹転ヘラケズリが施されている。

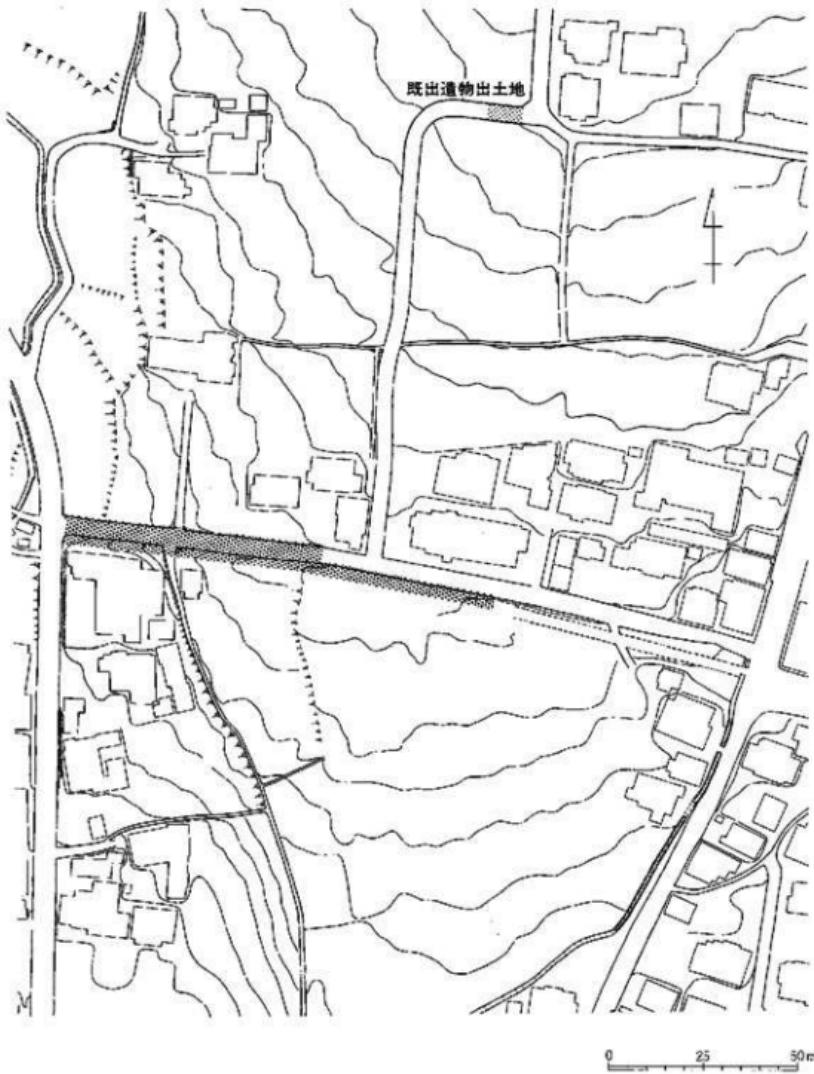
須恵器瓶類には長頸壺（42）、短頸壺（48・78）、詳細な器形不明（10・12・49・76・95）がみられる。いずれもロクロ調整痕が残るが10は肩部下半に手持ちヘラケズリが行われている。

須恵器甕類は破片は多いが出土したのは5点（16・81・86・110・114）のみである。胴部外側にタタキ目、口頭部にはロクロ調整痕を残す。

上記の他、数が少いものとして、外側にタタキ目、内面側方に粘土凹板を貼りつけた跡がみられる須恵器横瓶、内面に巻き上げ痕を明瞭に残す須恵器小甕、内面に巻き上げ痕をもち外側がハケメ・などの土師器円筒状のものなどがある。

#### 出土土器の時期

全体として十師器の供膳形態が少ないと、須恵器の底面切り離しに糸切りとヘラ切りがみられ、前者が圧倒的に多いことなどから、8世紀から9世紀前半に比定される土器群であろう。



第3図 調査地の範囲

## 第3章 調査結果

### 第1節 調査の概要

岡田西裏遺跡は松本市岡田下岡田に所在し、北側の山地より張出している尾根状の低い台地上に位置する。今回の調査は県道悲社岡田線改修工事に伴う調査であり、同遺跡は昭和58年にも北側の市道建設に伴い調査が行われているので今回が2回目の調査である。調査地は岡田神社の参道で、松、けやきの並木をなしており付近の人々の遊歩道となっている。

今回の調査で確認された遺構は竪穴住居址とピットで他に遺物の出土地点2ヶ所があり、第1地点～第4地点とした。第1地点～第4地点は全て台地の西側斜面にあたり、周辺での既出遺物分布と符合している。台地の東斜面にあたる参道入口付近は表土下20～30cmで黄褐色礫層の基盤層となり遺構・遺物はなかった。以下、地点別に概略を述べたい。

#### 第1地点

参道部分が周囲の畑より一段高くなっている。参道表土下30cm程が検出面で黄褐色層に掘込まれて第1号住居址が検出された。参道の松、けやき等の根や、南側は後世の擾乱により破壊がひどく、全体に不明な部分が多い。遺物は上師器甕、壺、小形甕、須恵器壺であり全体に土師器の出土割合が多い。

#### 第2地点

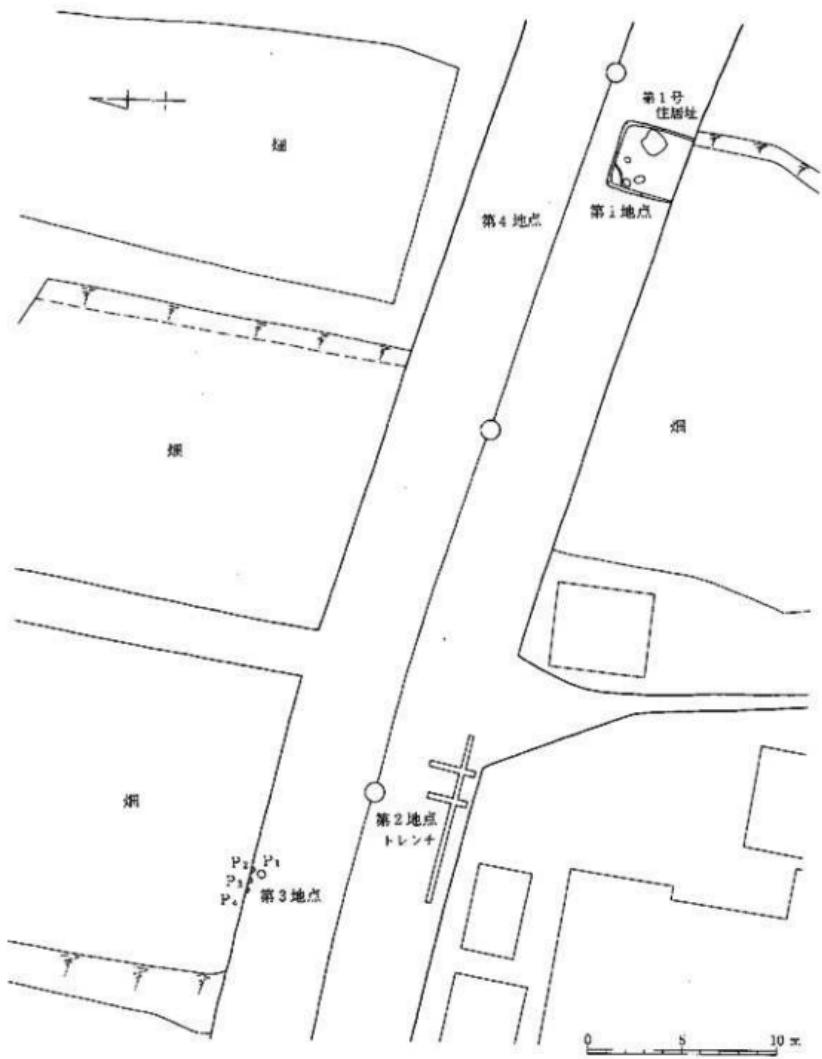
表土下10～15cmで黄色土粒の混る黒褐色礫層となり、多くの遺物出土を見たが、この面での遺構確認はできなかった。この地点は原地形を40～50cm程崩して参道や道路を開設しており、遺物出土地点は原地形の表面より50～60cm下となり、この間に遺構があった可能性もある。遺物は須恵器甕、壺、上師器甕、壺の破片、及び打製石斧である。

#### 第3地点

道路の北側で第2地点の反対側となる。原地形の表面より50～60cm下の黒色土内にP1～P4のピットが確認された。P2～P4は地区外にかかる。平面形状は円形を呈し、大きさは径30～50cmを測りP1が最も大きい。内部は浅く20cm前後で遺物の出土はない。

#### 第4地点

県道の北半分改修時に確認された。遺物の出土のみで遺構は認められなかった。遺物出土面は住居址の検出面と同じく黄褐色礫層で、原地形からは20～30cm下であり、現在の県道開設時に破壊されており遺構が存在した可能性もある。遺物は須恵器甕、壺、土師器甕、壺の破片である。



第1図 調査地周辺全体図

## 第2節 遺構と遺物

### 1. 遺構

#### 第1号住居址（第5・6・7図）

第1地点に検出された。当地の西側斜面の上部に位置する。住居址の北側部分ほとんどが阿田神社参道下にかかっていて、参道上の楓や松の根により破壊されており、また南側部分は検出面からはほとんど現在の地表上に出ていたため、塵芥の廐東穴などによる搅乱がひどく全体を把握するのが困難である。最も残りの良い部分は北壁とそれに続く東西のコーナーであり、そこから推定する形状は方形もしくは長方形を呈し、規模は380×400cm程、深さは20cm程度を測る。

覆土は礫が混る黒色上で床面は黄褐色土が混入する茶褐色土でありまた、礫が多く軟弱である。特に南側床面は搅乱がひどく床面らしいものの確認はできない。カマドは不明であるが、東側の駄馬床面及びP 3上面にわずかであるが焼土粒が認められた。カマドの構築位置としては可能性があると思われるが、根のわきにあたるため根により施設等は破壊されており痕跡も確認できなかった。

柱穴と思われるものは確認されず、ピットがP 1～4まで4つ認められた。P 1は北壁寄にあり径26cmを測る円形を呈する。深さは約20cmである。P 2は西壁寄にあり80×60cmを測る横円形を呈する。深さは約15cmを測る。P 3は東壁に接してあり150×140cm前後を測る不整方形を呈し、深さは30～40cm前後を測る。内部は2ヶ及び3ヶの落込み状となっており、土師器壺、坏片が出土した。床面上でピットが切合っていた可能性もあるが搅乱によって検出は不可能である。P 4は西壁北寄にあり径64×58cmを測る不整円形を呈し、深さは10cm前後の浅い落込みとなっている。この住居址の特徴は北西角に一段深く段があることであろう。段は130×70cmの方形状で床面との差は約20cm、検出面との差は約15cmである。段上に土師器壺（9、10）が出土した。9は壺の下半分であるが段上に置いた状態で、10は横倒しになった状態で…括出上した。北壁東寄は小礫を含む黄褐色土が床面上に流れ出した様になっていたため、この部分にも段状の遺構があった可能性がある。この上には土師器壺（4・5・6）小型壺（7）の白土を見た。

### 2. 土器

#### 第1号住居址出土の土器（第9・10図1～22）

床面上、段上および覆土中から出土しており、特に段上と床面上から一括品が得られた（1～10）。種別・器種でみると、土師器壺（2～6）、壺（8～10・12・13・18・22）、小形壺（7・11・17）、須恵器壺（1・14・16・19～21）、壺（15）が図示できている。

土師器壺はいずれも底部から直線的に体部が外開する形態をとるが、口径により中形品（3・6）と小形品（2・4・5）の規格に分れる。調整はロクロ使用の痕跡が残り、底面に回転糸切り痕、内面にはヘラミガキの後、黒色処理が行われている。焼成はきわめて良好で胎土は堅く、内面の黒

色処理も光沢を帯びる見事なものであった。4の体部外面に墨書、3・6内面に斜放射暗文がある。土師器壇はすべて長胴形になるもので、胴部外面に密な縦のハケメ、口縁部内面にカキ目をもち口縁部はよこなで、胴部内面にはなでと縦の浅い溝状調整痕がみられる。口縁部付近の調整痕はロクロの回転を用いたものと考えられる。10は段上から一括出土したものである。

土師器小形壇はロクロ調整痕をもつ薄手のもので、胴部外面と口縁内面にカキ目が施されている。底面は回転糸切り痕が残る。

須恵器壺は、底面に糸切り痕を残し体部が大きく外開するもの（1・16・19～21）と有台のもの（14）の2種がある。いずれも焼成が良い。

須恵器壺は口頭部片（15）で、ロクロ調整痕がみられる。四耳壺の一部と考えられる。

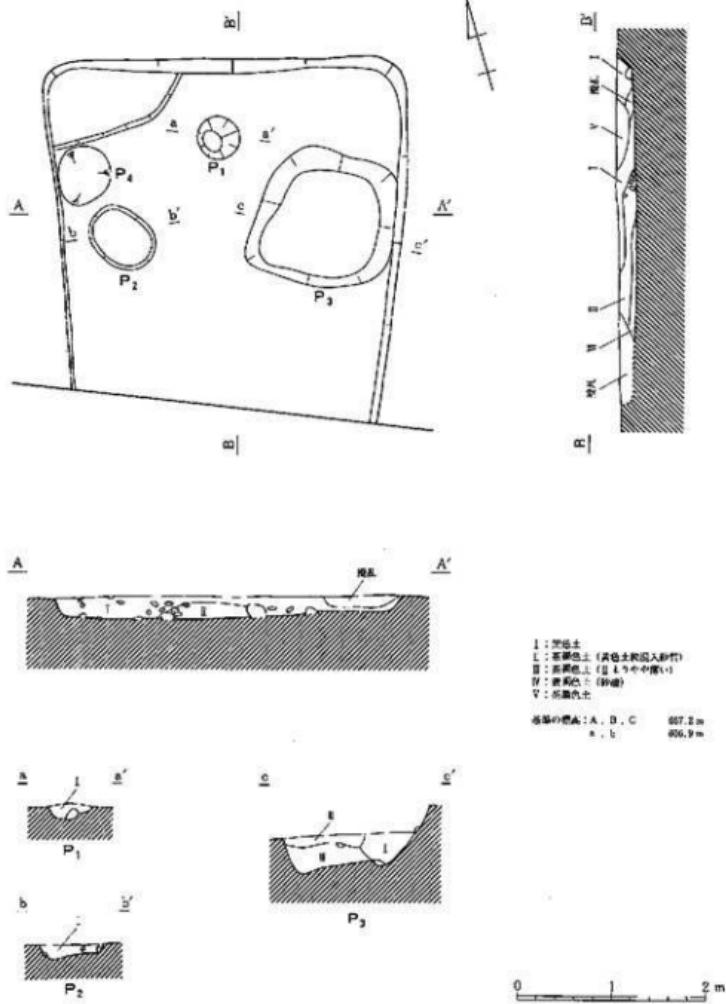
全体的にみて本址出土の土器群は、供膳形態において上陣器と須恵器が同程度の比率で存在し、上師器壺は外側に縦ハケメをもつ定形化したものになっている点からみて、9世紀代の後半に位置づけられる資料と言えよう。

## 第2地点出土の土器（第1図23～32）

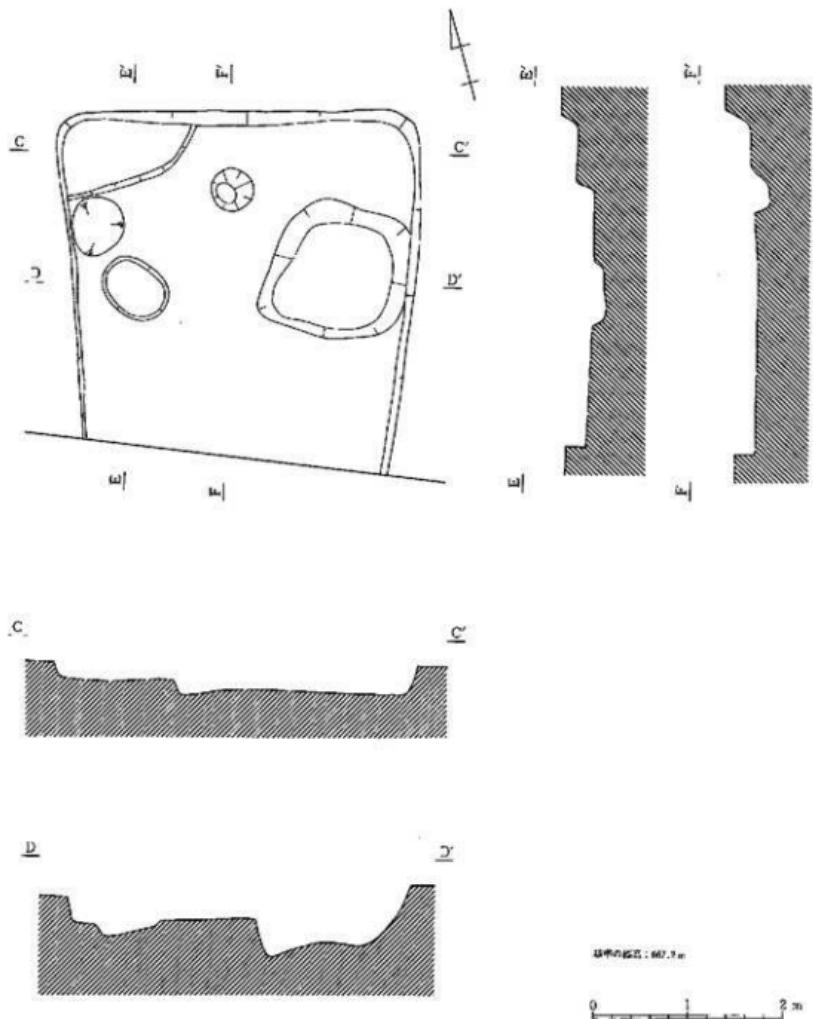
土師器壇（31）、須恵器壺（24～26・28～30）・蓋（23）・裏（27）、近世陶器鉢（32）が図示できたものである。須恵器壺には有台のもの（24～26・29）と無台のもの（28・30）の2種がみられる。前者には強く外開する所謂ふんばる形の高台が付され、29には高台が落削した痕跡が観察される。後者の28は静止糸切り痕を残す底面外周に広く二次底部面状の部分をもつもの、30は底面すべてを回転ヘラケズリされ、壺としては類例の少ないものである。29の底面にはヘラ記号がみられる。23の須恵器蓋は端部が斜め外方へ屈曲するもので内外面にロクロ調整痕を残す。須恵器裏（27）は強く外反する口頭部のみだが、胴部にタタキ目をもった中形のものと推定される。31の土師器壇は底面回転糸切り・付け高台で、内面ヘラミカキ・黒色処理である。32の近世陶器は薄く橙がかる灰白色の素地に淡練透明の釉が厚くかけられている。

当地点出土の土器は全体を占める須恵器類が外形からみて8世紀後半から9世紀前半の様相を呈しており、土師器壇・近世陶器と時期差がある。

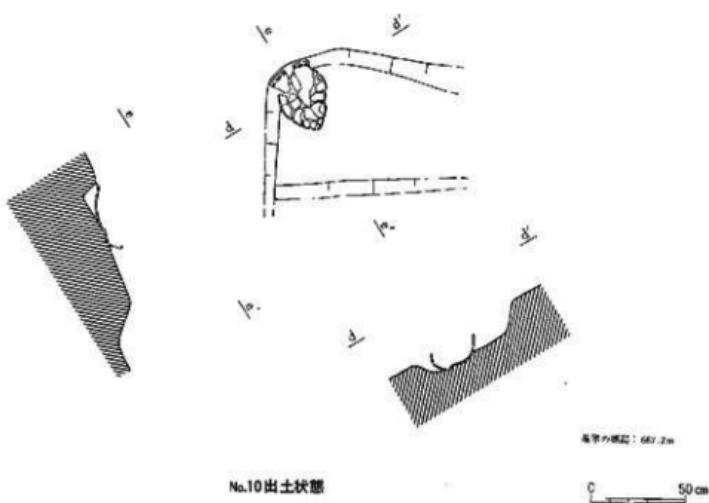
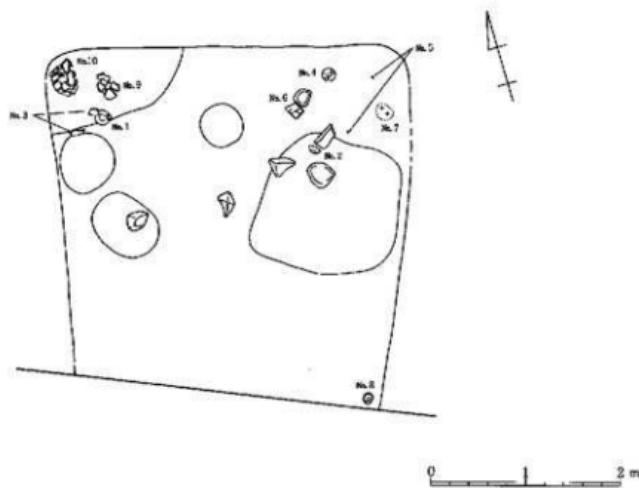
33の羽筆は第1地点周辺の表採で器面荒れるが焼成からみて中世以降のものらしい。



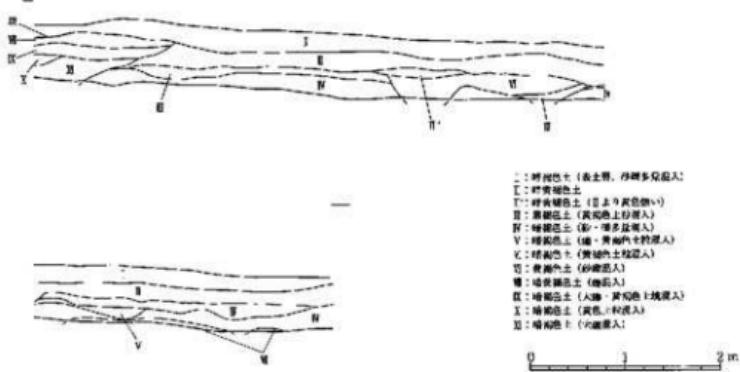
第5図 第1号住居址(1)



第6図 第1号住居址(2)



第7図 第1号住居址遺物出土



第8図 第2地点土層図

### 土 器 鏡 察 表

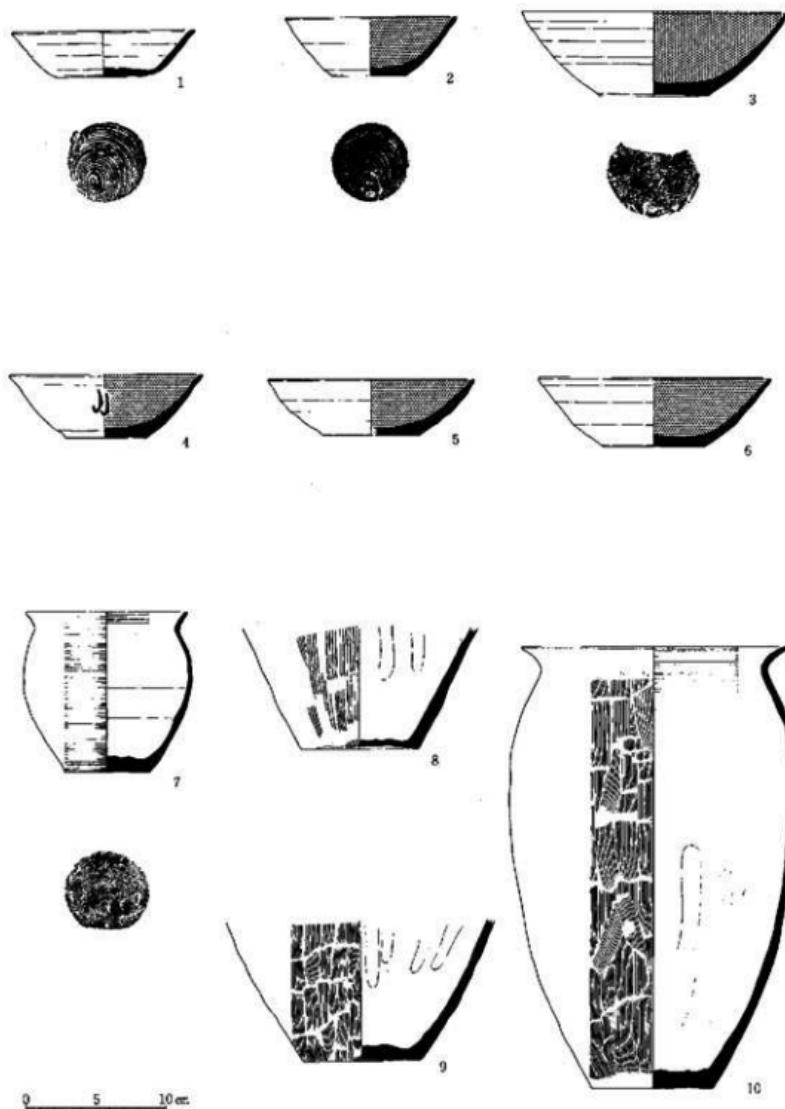
番	出 土 地 点	種 別 器 形	計		測 定		外 四 面	内 四 面	成 形・調 整・形 态 の 特 徴	
			口 径	底 径	器 高	重 量				
1	第 1 号 住居 壁	須 惠 器 环	13.0cm	6.2cm	3.3cm	118g	灰	灰	コクロナデ・回転糸切り	
2	"	七 錫 器 "	12.2	5.4	4.1	132	赤	褐	"	内面ヘラミガキ・黒色处理
3	"	"	18.8	7.6	6.0	150	赤	褐	"	"
4	"	"	13.7	5.8	4.9	155	赤	褐	"	"
5	"	"	14.7	6.9	4.0	152	赤	黑	"	"
6	"	"	16.5	7.1	4.9	223	淡	茶	褐	"
7	"	小 形 瓶	11.5	6.1	11.9	280	淡黄褐色～暗	褐	褐	"
8	"	"	8.5	—	—	228	淡黄褐色～黑	褐	褐	外側ハケメ・内面溝状調整部
9	"	"	8.4	—	—	570	淡	灰	褐	"
10	"	P 3	19.0	8.8	31.5	1350	淡	茶	褐	山陰内面カキ日・頭部外型ハケメ・内面溝状調整部
11	"	小 形 製	5.1	—	—	84	茶	褐	褐	コクロナデ・回転糸切り
12	"	更 (18.2)	—	—	—	65	暗	褐	褐	外側ハケメ・口縁内面カキ目
13	"	" (25.0)	—	—	—	15	暗	褐	褐	"
14	"	須 惠 器 环	(11.3)	—	—	6	黑	褐	ロコロナデ	
15	"	" 瓶 (20.7)	—	—	—	40	紫	褐	"	全體に自然乾
16	"	" 环	12.8	5.4	3.4	192	黄	褐	"	・回転糸切り
17	"	土 鈔 器 小 形 製	(6.1)	—	—	20	淡	灰	褐	外側ハケメ・口縁内面カキ日
18	"	" 瓶 (18.9)	—	—	—	16	赤	褐	ロコロナデ	
19	"	須 惠 器 环 (13.7)	—	—	—	10	暗	褐	"	・回転糸切り
20	"	" " (8.0)	—	—	—	30	暗	褐	"	コクロナデ
21	"	" " (13.1)	—	—	—	10	暗	褐	"	内面カキ日
22	"	土 鈔 器 瓶 (21.0)	—	—	—	19	淡	灰	褐	ロコロナデ
23	第 2 地 点	須 惠 器 瓶	(14.6)	—	—	15	青	褐	ロコロナデ	
24	"	" 环 (14.0)	(11.4)	3.7	—	15	暗	褐	"	・付け高台
25	"	" " (11.5)	—	—	—	28	青	褐	"	"
26	"	" " (14.6)	—	—	—	10	赤	褐	"	
27	"	" 瓶 (17.3)	—	—	—	27	暗	褐	"	
28	"	" 环	5.8	—	—	56	暗	褐	"	・溝止糸切り
29	"	" "	6.1	—	—	85	淡	茶	褐	・表面回転ヘラケズリ・中央糸切り溝・高台落削
30	"	" "(?)	7.2	—	—	26	淡	茶	褐	・表面回転ヘラケズリ
31	"	土 鈔 器 瓶	—	—	—	84	淡	黄	褐	・溝止糸切り・付け高台・内面ヘラミガキ・黒色处理
32	"	陶 器 脼	—	—	—	50	黄	褐	ロコロナデ・高台削り出し・高台内面無用	
33	第 1 地 点 表 案	表 案 (24.0)	—	—	—	275	赤	褐	褐	路面荒れる

石製品観察表

No.	出土地点	種別	計測値				石質	備考
			長さcm	幅cm	厚さcm	重量g		
1	第1地点表接	打製石斧	( 9.5)	7.0	2.3	176	真岩	
2	第2地点	"	9.2	6.0	2.2	178	粘板岩	
3	第1号住居址	石？	19.5	9.7	3.5	7,300	ヒン岩	上面磨滅、炭化物付着
4	第1地点表接	石皿	( 9.4)	( 8.0)	3.5	2,800	石英閃綠岩	風化が激しく、全面ひび割れ
5	第1号住居址	砾石	( 4.3)	( 4.2)	1.5	64	砂岩	部分

鉄製品観察表

No.	出土地点	製品名	計測値				材質	備考
			長径cm	短径cm	厚さcm	重量g		
6	第1地点表接	騎銚車	6.1	6.0	0.15	27	鐵	



第9区 第1号住居址出土二器实测图(1)



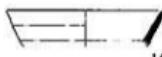
11



12



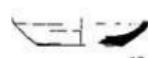
13



14



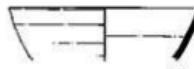
16



17



18



19



20



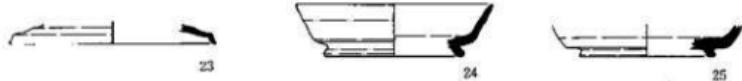
21



22

A scale bar at the bottom right of the page, ranging from 0 to 10 cm.

第10図 表1号住居址出土土器実測図(2)



23

24

25



26

27



28

29

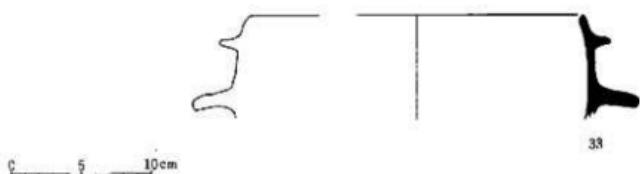
30



31



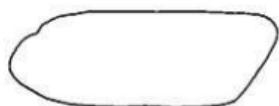
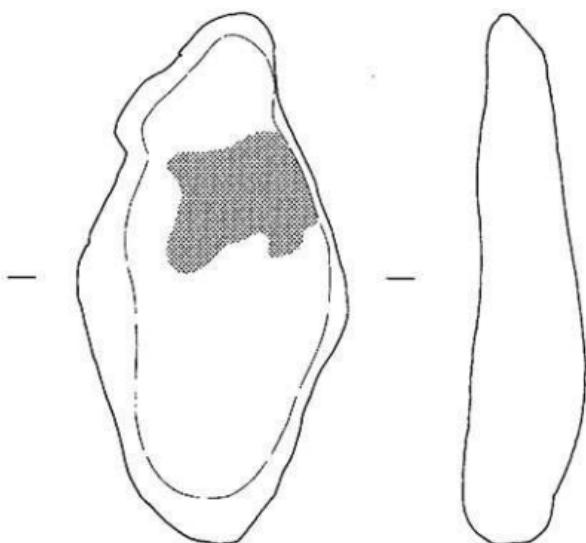
32



33

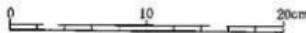
— 10 cm —

第11図 表様・第2地点出土土器実測図

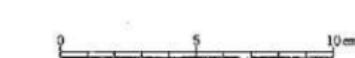
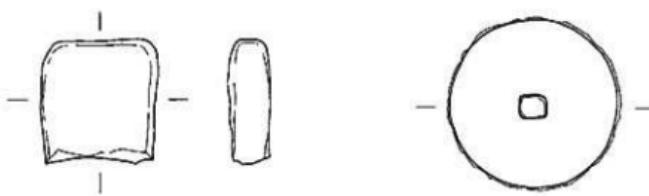
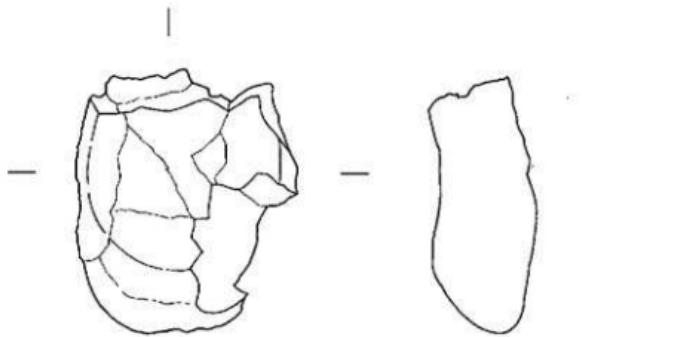


3

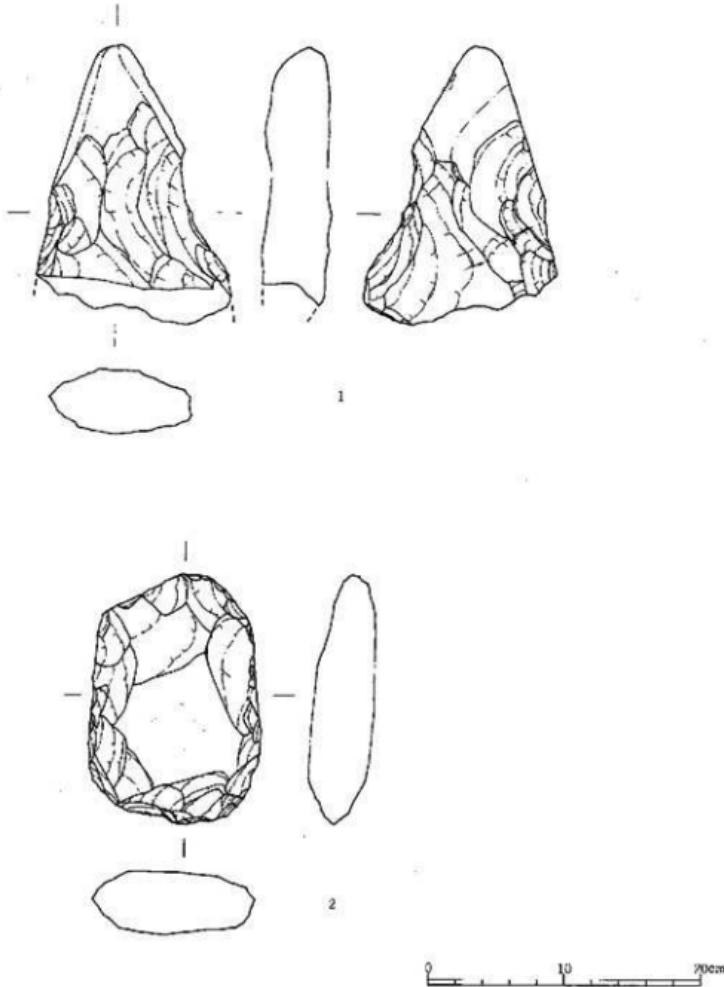
トーンは、炭化物の付着を示す。



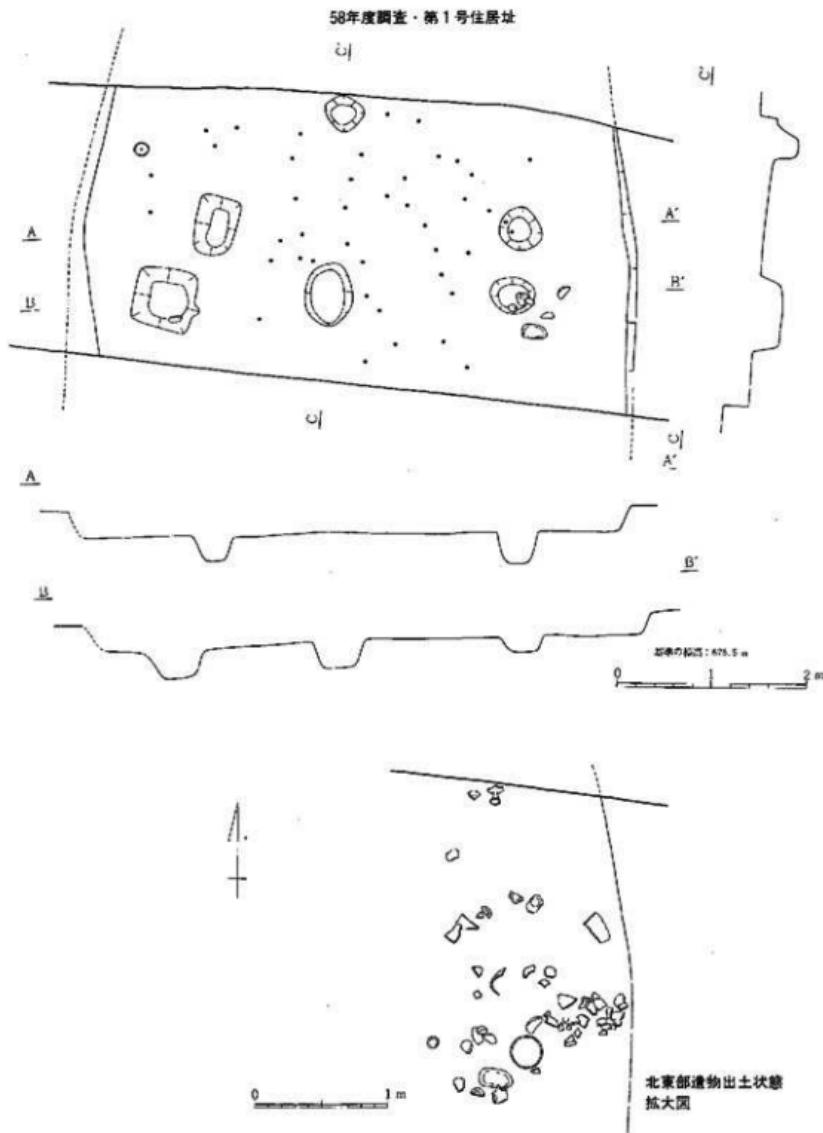
第12図 第1号住居址出土石製品



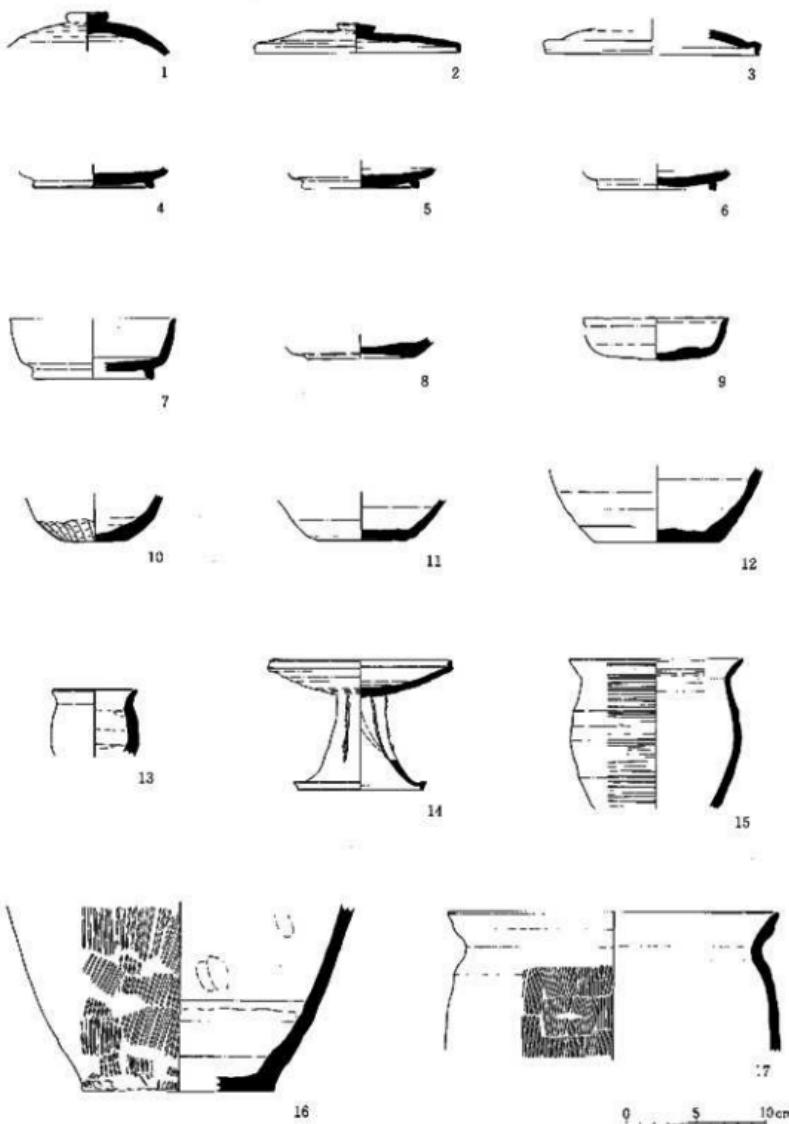
第13図 表採・第1地点出土石製品、鉄製品



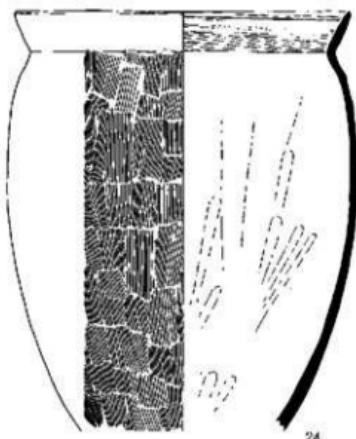
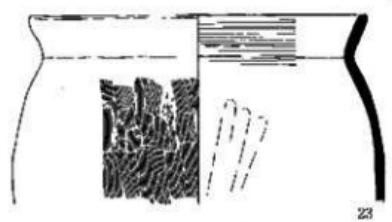
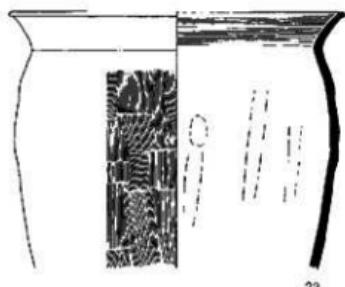
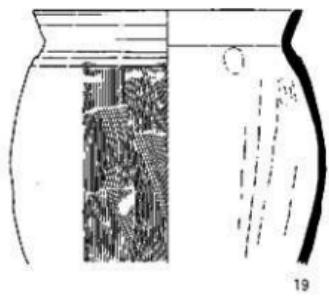
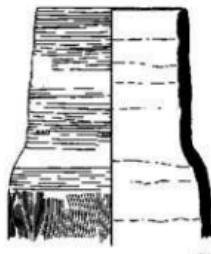
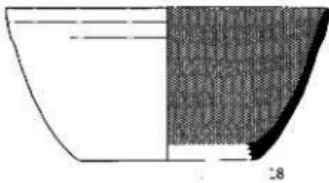
第14図 表採・第2地点出土石製品



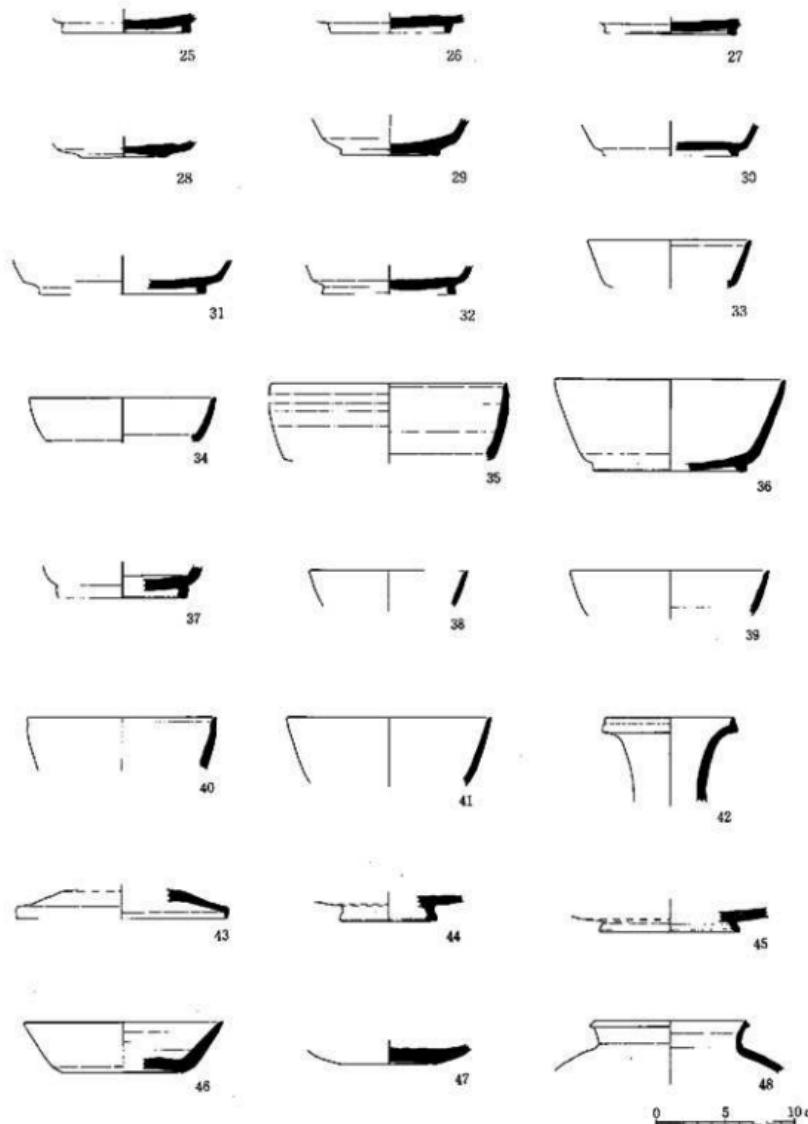
第15図 既出遺物出土状態



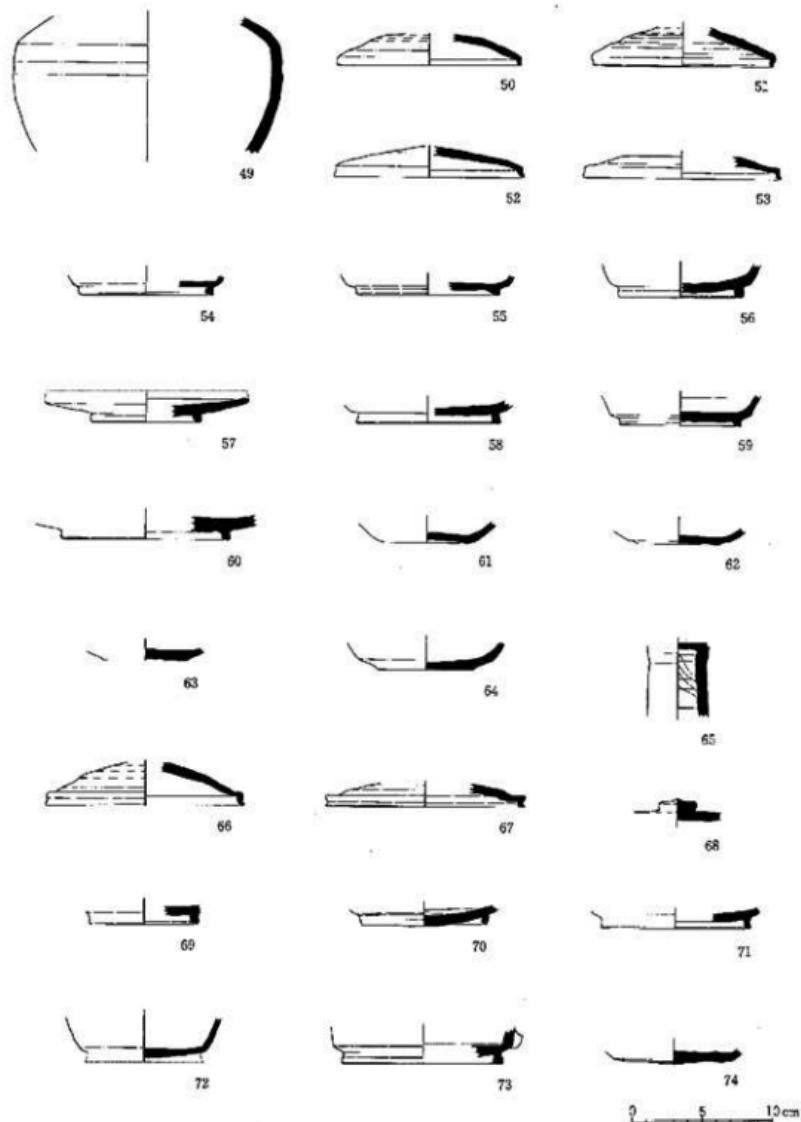
第16図 既出遺物実測図(1)



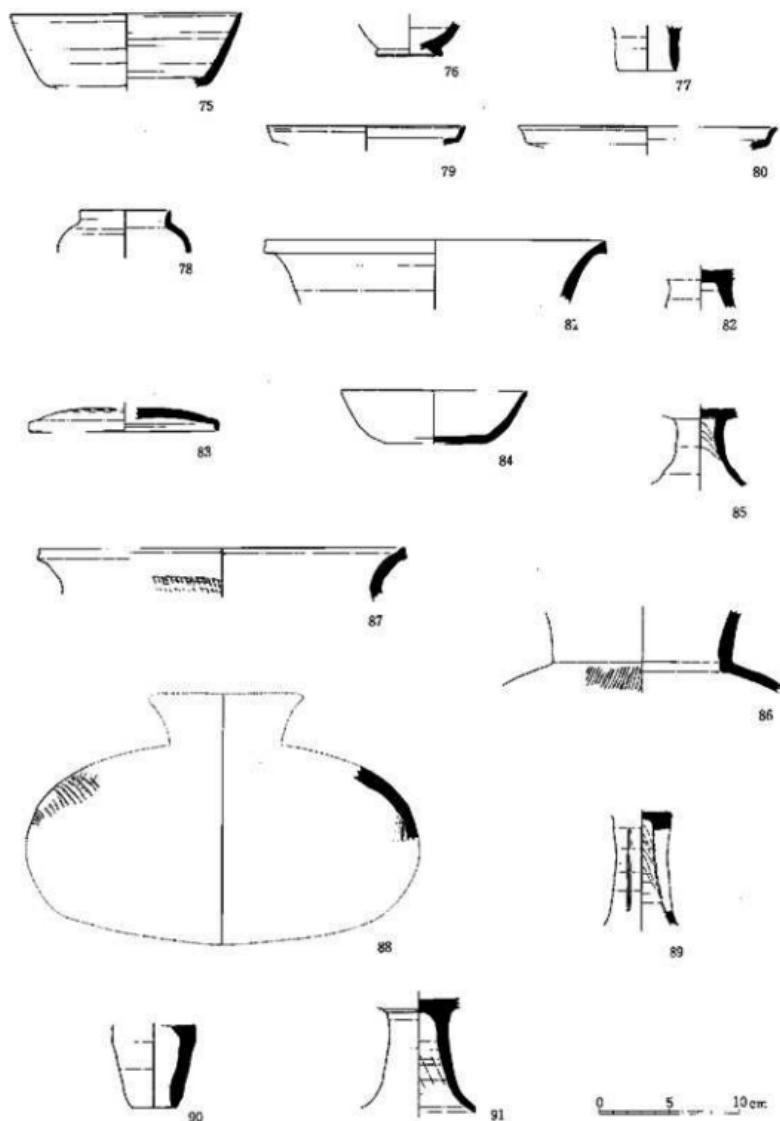
第17図 既出遺物実測図 (2)



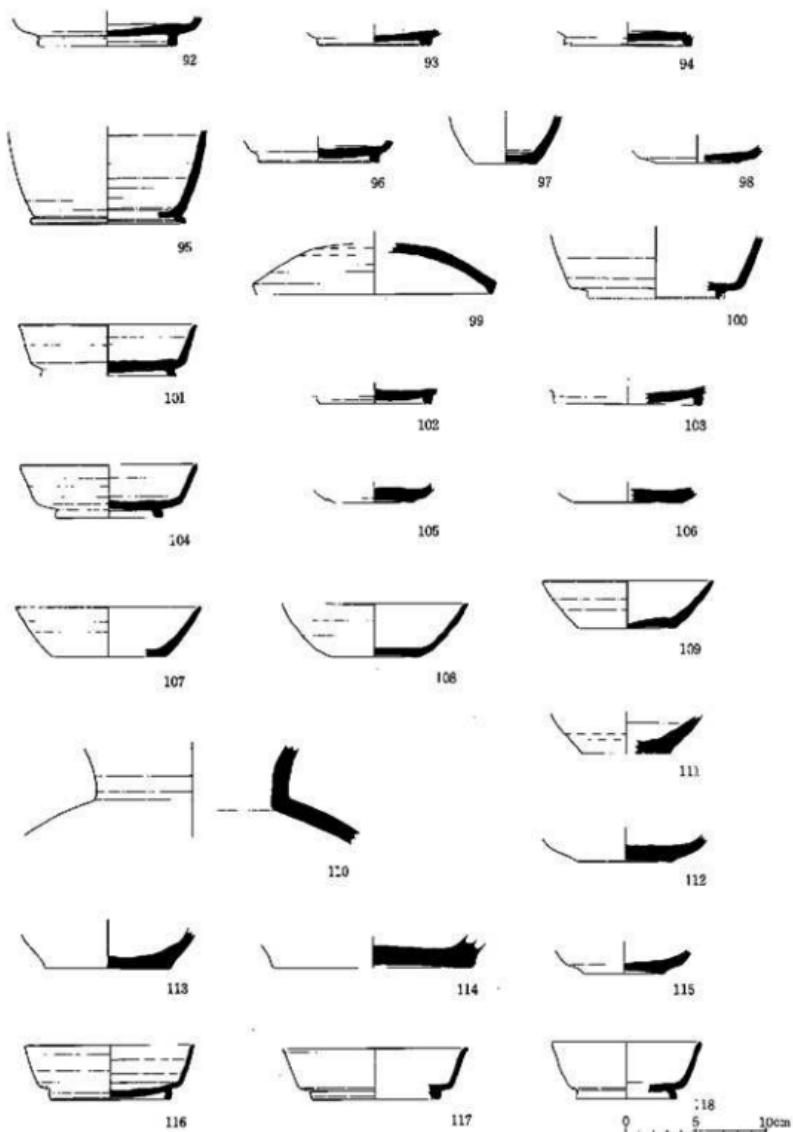
第18図 発出遺物実測図 (3)



第19図 既出遺物実測図 (4)



第20図 既出遺物実測図 (5)



第21図 既出遺物実測図 (6)

### 第3節 調査のまとめ

本址は岡田神社参道があり、大鳥居や太擧が神社の莊嚴さを醸しだしている。岡田神社は「延喜式」の神名帳に載っているほどの古社で、城山から連なる丘陵を背に、岡田、本郷に向かって東面している。社域は3,200m<sup>2</sup>を越すほど広く、参道の長さも300mにおよぶ。本殿は1間1間の流れ造りで、他に2間×3間の舞屋がある。岡田郷は水が少なく、旱魃の年も多く農耕の神を祀り豊作を願って社神は五穀の神である保食神（豐受大神）であるが、もとは女鳥羽川上流の稻倉に鎮座する水口神社にあった古社で、現在地に下がったといわれ、岡田神社が柴宿といわれていることも考え合わせて、女鳥羽川を祀る水神である。

このように岡田郷は「延喜式」の成立した927年以前に開かれていたことを示し、この地が古代から栄えていたことを窺わせる。その為には郷となる基礎的な力がなくてはならない。この地は岡田、水汲にかけて古墳群のあるところであり、これが古代以降に引き継がれていったものと思われる。

今回の調査で検出された住居址は僅か1軒であるが、ここから出土した土師器の壺、甕、小形甕や須恵器の壺、壺等により本址の時期は9世紀からその後半に位置するものと思われる。更に第1号住居址の西側の一段段丘を下がった地点からは、ほとんど須恵器の壺ばかりが出土したが、これらは8世紀の後半から9世紀の前半のものである。更に前回調査をした西裏遺跡からの出土遺物は8世紀から9世紀前半にわたるものである。

つまり、西裏遺跡では8世紀から9世紀の後半にかけて居住した遺跡と云える。この遺跡の南側には塚塚があり、又、東側の原には合科古墳があり、共に積石塚である。これらは7世紀の古墳時代後期に属する。輪を広げればますます時代が遡り、本址を含めて岡田の開発の時期の古さがわかる。

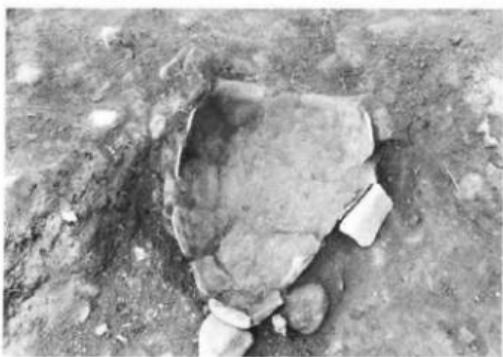
次に第1号住居址について見ると、やや小振りながらもある程度まとまった遺物を出土しておりまた、住居址内の西側にはベット状の棚があり、ここからも遺物が検出されているが、低い部分の床面と堅さを比較しても特別に変化はなかった。

このように短期間で僅かな調査範囲であったが、それなりの成果を得、又これが今後の資料として活用されれば有り難い。

終わりにこの調査にご理解戴いた関係機関の方々ならびに、調査にご協力下さった岡田出版所・公民館・史談会・作業員の方々に衷心よりお礼申しあげる。



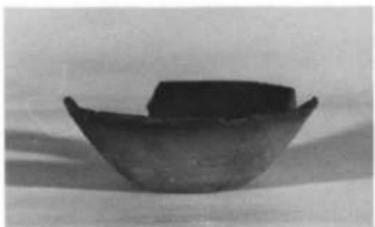
第1号住居址



10の甕出土状況



1



2



1 底部



4



1 底部拡大



4 墨書

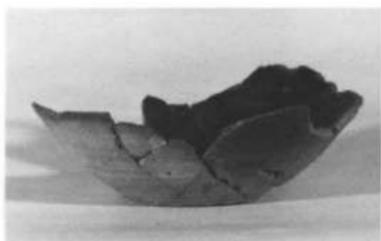
図版2



3



5



6



9



7

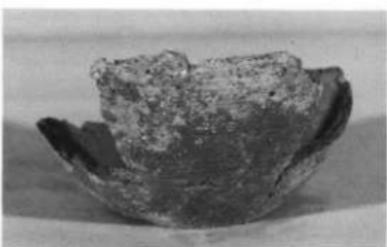


9 底部

图版3



10



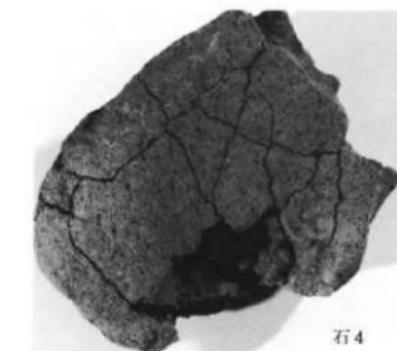
11



12



石 1



石 3

---

松本市文化財調査報告No.44

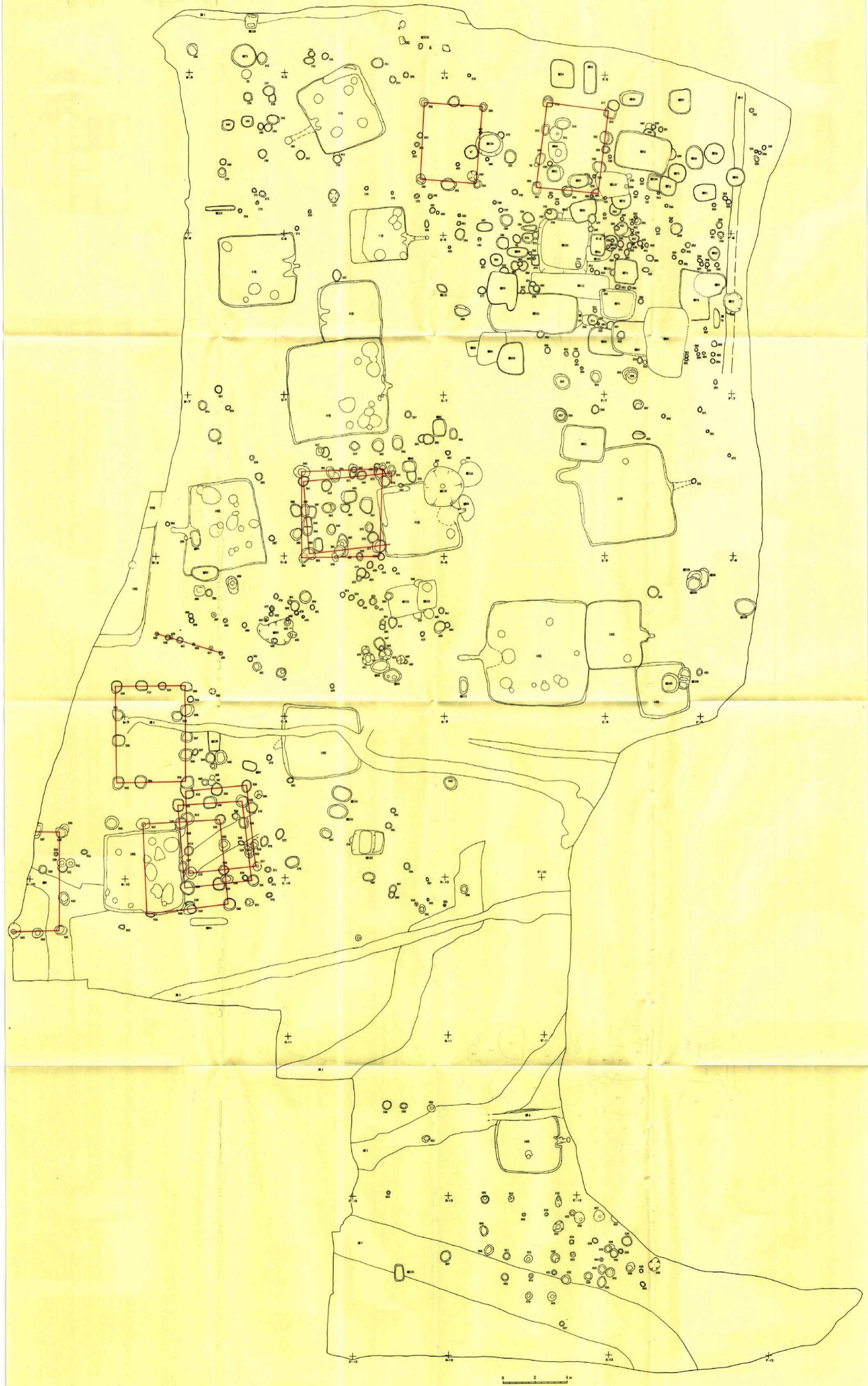
松本市岡田西裏遺跡

昭和61年3月20日 印刷

昭和61年3月31日 発行

発行 長野県松本建設事務所  
松本市教育委員会  
印刷 電算印刷株式会社

---



## 付図1 遺構全体図 2地区



## 付図2 遺構全体図 1地区

